

世界の津波被災地から 世界の津波ツーリズム拠点へ

ラフマダニ アチェ州文化観光局

Rahmadhani (Dinas Kebudayaan dan Pariwisata)



私どもはつねに、アチェで起こった災害だけでなく、世界中で起きている災害に関心を向けながら仕事をしています。本日は、人びとの災害に対応する力を、観光を通じてどのように高めるかを考えたいと思います。

はじめに、アチェの津波の悲劇を世界の津波ツーリズムにつなげることにについて考えたいと思います。

災害はどこで起こったものにせよ、いずれも非常にネガティブな結果をもたらしているといえます。単に物が壊れたり人が亡くなったりするだけではなく、社会全体の経済状況、社会状況、そして自然環境も含めた周辺の状況に大きな影響を及ぼします。

そのなかでも、特に戦争は大きなインパクトをもたらす災害であるといえます。第一次世界大戦、第二次世界大戦、そして2004年のアチェの津波は、いずれも社会全体に大きな被害をもたらしたもので、人類社会にとって忘れがたい大きな危機的な事態をもたらしたといえるでしょう。

■「ともに前よりよいアチェを築こう」を 合い言葉に立ち上がる

2004年にアチェで生じた津波災害について申しあげれば、これは大規模な被害をもたらし、とりわけ多くの人が亡くなりました。人が亡くなったということは人材も含めて亡くなったということであって、社会に非常に大きな影響を及ぼしています。亡くなった方と行方不明者を合わせて25万人にのぼります。

あのとき私たちは「こんなことが起こるのか」とたいへん大きなショックを受けましたが、それ以後、私たちは「なにが起こっても対応する」という思いを強く持って生きてきました。

資料8-1に挙げたのは、私たちが普段暮らしていた町が一つの津波によってすっかり姿を変えてしまった、私たちの忘れられないあの一日の写真です。

私たちの津波後の再建の合い言葉は、「さあ、いっしょに前よりもっとよいアチェを築こう」でした。そ

のような思いをもとに私たちはここ数年暮らしてきて、いまここに立ちあがってきているわけです。

私たちは多くのものを失いました。物を失っただけでなく、人材を失い、そして思い出を失いました。思い出、つまり生活の原動力となる記憶も失ったわけですが、それでも私たちはとにかく立ちあがろうとしてここまで来ました。そしてなんとかしてアチェの民の力を高めたいという思いでやってきました。

■アチェの経験を世界に、次代に伝えるための 津波ツーリズム

これからのよりよいアチェづくりのなかで必要なのが持続的な観光開発です。別のいい方をすれば津波遺産ツーリズムとも言えます。アチェでツーリズムを促進することはアチェがもともと備えていた地域のかたちに即しています。アチェは歴史的に東西交易の拠点になってきたことがありますし、さまざまな歴史的な遺物があります。また、世界各地の交流の結節点



資料8-1 津波直後のようす



資料8-2 津波直後のようす

として文化も特徴的です。それらのものを活用しながら、それに加えて人類史的なできごとである津波の遺産を活用してツーリズムを発展させたいと考えています。

しかし、津波ツーリズムを進めるうえで気をつけなければならないことがあります。それは、私たちがあたたかも津波の遺産を商売の道具に使っているのではないかと見られることです。私たちがアチェで起こったことがらをもとにツーリズムの振興をと言うときに念頭に置いているのは、過去に起こったことがら、私たちの経験したことがらを商品として扱うのではなく、教材として、学びの素材として活用することです。そのような意味で私たちはツーリズムといっています。

津波の遺物は世界の人びとの関心をひいており、世界の観光市場で有効なものだと考えています。これを積極的に活用することで、地域の人びとの活動も活発になると考えています。しかし忘れてはならないのは、それは観光のためだけにあるのではなく、すべて災害対応の力を強めるためであるということです。

バンダアチェが津波ツーリズムの拠点になるということは、バンダアチェが津波からの復興の生きた実験場になるということ、すなわちこの場で人びとに起こっていることがほかの人びとの学びになるという意味での実験場になるという意味だと思います。

私自身も、海外の博物館について学ぶために神戸に行ってきました。私の見るところ、神戸の「人と防災未来センター」もまた一つの観光の拠点になっていると

思います。このようにツーリズムとして津波を活かし続けることは、私たちがあの日起こったことと、その後を経験したことを忘れず、次の世代に伝える意味で意義があると思います。

資料8-2に挙げたのは、津波後のようすを示したものです。これを見るだけでも胸が痛みますが、このような記憶こそ子どもたちに伝えていかなければいけないと思います。

私たちが世界中の人びとにアチェに来て感じてほしい、見てほしいと思うのは、津波の遺物そのものではなく、それにまつわるお話、私たちの語り、思いであり、それを共有してほしいのです。私たちは世界からやってきた方がたに感謝したいですし、今後もそのような関係をつくっていきたいと思います。そして、このように観光を通じて住民の経済力を強めることも重要だと思います。

■ 生き残った人々の記憶を活かし 津波博物館を世界的な防災のシンボルに

資料8-3に挙げたのは、私たちが考える津波ツーリズムの代表的な拠点です。

いまこの会場となっている津波博物館は、まさに津波ツーリズムを通じたアチェ地域の創造的な復興、災害対応力の強化のアイコンになると考えています。そして津波博物館が災害対応の拠点になるよう願っています。津波博物館が媒体となって若い人たちの災害対応力が向上するのではないかと思います。また、津波博物館がきちんと機能することによって、災害だけではなく人びとのさまざまな事柄に対応する力も拡



資料8-4 津波の遺産として整備される公園

資料8-3 津波ツーリズムの拠点

津波博物館

津波避難棟

大モスク

ランプウ・モスク

シアクアラの墓所

集団埋葬地

「世界の国々にありがとう」公園

げることができるのではないかと考えています。

博物館どうしの協力も、インターネットなどを通じてどんどん進めたいと思います。

重要なのは、人びとの意識だと思います。そのうえで、口頭で伝えられる情報も重要と考えて、そういったものを集めるプロジェクトも行なっています。

資料8-4に挙げた公園などをはじめとするさまざま

な津波の遺物が観光の拠点になると思います。

苦い経験というものは、苦ければ苦いほどやる気をかきたてるものだと思います。この津波博物館が一つの大きなシンボルとなって人びとの防災力を高め、また創造的復興に資することを願ってやみません。

重要なのは、生き残った人びとのことであると思います。生き残った人びとがこれからどのように発展していくのか、またさらに防災教育、災害対応力の向上という部分でいえば、これら生き残った人びとの語りを集めることが重要だろうと思っています。語りを集めるうえでは、人びとが話したいと思うようになるまできちんと待つことが重要です。

私たちはこの津波博物館を国際的な博物館にしたいと思います。そのためには、京都大学地域研究統合情報センターやJICAを含めた関係各機関と協力していきたいと思っています。